

OUIK Newsletter

2020 年 秋号



シンポジウム「いしかわ・かなざわから発信する生物多様性 10 年のあゆみ ~ 持続可能な次の 10 年に向けて ~」 (5 頁)

目次

活動紹介 **2 ページ**

- IMAGINE KANAZAWA 2030 「SDGs カフェ」第 11 回~13 回+高校生コラボ企画
- シンポジウム「いしかわ・かなざわから発信する生物多様性 10 年のあゆみ ~ 持続可能な次の 10 年に向けて ~」
- 2020 年度日本造園学会 全国大会ポスターセッション
- 第 1 回能登の里海セミナー「里海の保全から考える SDG14 の達成 - 海洋汚染問題を考える -」
- 2020 年プリンストン大学バーチャルプログラム in 石川
- 菊川・幸町ウォーキングワークショップ
- 珠洲市小学校 SDGs 学習「ゴール 14 : 海の豊かさを守ろう」オンラインレクチャー
- GIAHS 保全計画策定勉強会
- 第 2 回能登の里海セミナー「里海の保全から考える SDG14 の達成 - 海洋汚染問題を考える -」
- 地域から考える!! 「SDGs 指標のモニタリングとオープンガバナンス」~地域での SDGs 実装に向けて、自治体はどう変わるか~

インタビュー記事のご案内 **10 ページ**

読者のみなさまへ **10 ページ**

IMAGINE KANAZAWA 2030 「SDGs カフェ」

地域の皆さまと協働し、毎回様々なテーマを設定して2030年の金沢を想像し対話する場、IMAGINE KANAZAWA 2030 SDGs カフェ。そんなSDGsカフェも、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、第11回からはウェビナー(*)に切り替え開催しました。今回は、SDGs カフェ第11回から13回+高校生コラボ企画のダイジェスト版をお届けします。

*ウェビナーとは？ ウェブとセミナーを合わせた言葉で、インターネット上で行うセミナーのこと。

第11回は、「持続とは変化!? ~with コロナ時代の働き方とリモートワーク~」をテーマに緊急企画。

まずは永井三岐子(国連大学 OUIK 事務局長)から、恒例のSDGsの概要と、IMAGINE KANAZAWA 2030の主旨説明が行われました。今回は、SDGsの17のゴールのうち、コロナと直接関係あるゴールは「働きがいも経済成長も」(Goal8)と、「すべての人に健康と福祉を」(Goal3)などの解説も加わりました。



イマジンしていただいたのは4月から全社リモートワークを導入した、まちづくりのコンサルタントなどを行う安江雪菜氏((株)計画情報研究所 代表取締役)。今回、安江氏はこのカフェのために、金沢イクボス企業同盟と連携し、「リモートワーク緊急アンケート」をウェブ上で実施しました。その結果、「社内体制が整っていない」「リモートワークが可能な業務ではない」「自己管理が難しい」などの課題が挙がったと同時に、リモートワークは企業文化を変えるチャンスとして期待できそうな意見も多数ありました。

さらに安江氏はコロナ以前よりリモートワークのインフラを整えていた経験も踏まえ、「自由と責任の風土」、「仕事の成果とは何かを問い直す」などの5つの必要性をポイントに挙げ、「常識や慣例からありたい姿にシフトすることを真剣に考えたほうがいい。いまがそのチャンス。組織の存在意義などがシビアに問われているのではないかと」続けました。

アイデアを提供くださったのは、金沢市出身の野水克也氏(サイボウズ(株)社長室フェロー)。働き方改革

の最前線企業として知られるサイボウズでは、BCP(*)の一環としてリモートワークに挑戦してきた歴史があり、3月初めからは、ほとんど誰も出社していないとのこと。

*BCPとは？ 災害などの緊急事態が発生したときに、企業が損害を最小限に抑え、事業の継続や復旧を図るための計画。

「持続可能とは伝統を守ることとは違う。変わっていくもの、変わるものが生き残ることができる。今は業務効率が落ちて仕方がないと割り切ることが必要で経営側も全く同じにはならないことを理解すべき」と野水氏は述べました。また、リモートワークのコツとして、「まずマネージャーから実践する」「業務フローと職掌を明確にする」「基本的に性善説で」などのアドバイスもいただきました。

テレワークのコツ

- まずマネージャーからやる
- 業務フローと職掌を明確にする
- 基本的に性善説で
- 雑談をネット上でもやる
- できるだけ全員でやる



質問がしやすい、スライドが見やすい、遠方からも参加しやすい、といったウェビナーならではの良さを主催側も参加者側も共感できた初めてのウェビナーの試みでした。

第12回は、「~with コロナ時代だから考えたい~ ESG投資が金沢に根付くには!?」をテーマとしました。

自然や環境、働く人々を取り巻く社会課題などの解決と、持続可能な経済発展——その両方を実現させるキーワードが「ESG投資」です。このwith コロナ時代で社会変革への機運が高まりつつある今、地方からできることを考えてみました。



*ESGとは？ Environmental (環境)、Social (社会)、Governance (統治、あるいは経営)の頭文字をとって作られた言葉。

イマジンしてくださったのは、金沢にある伝統発酵食品の老舗（株）四十萬谷本舗の六代目・専務取締役の四十萬谷正和氏。若い世代に糀や発酵食の良さを伝えるワークショップを開催したり、健康経営を推進されている方々と組んで発酵の価値を届けるような活動をしたりと、多様な取り組みを行っています。コロナ禍もあって、現在はオンラインでワークショップも開催しており、これがかえって、主力商品であるかぶら寿しなどにあまり興味がなかった方々にも触れていただく好機になっているそうです。

かぶら寿しとは



「塩漬けたかぶ」に「熟成させた鰯」を挟み、米糀で漬込んで発酵させた石川県伝統の発酵食品です。



四十萬氏には 2030 年の金沢の姿をイマジンし、次の 3 つを挙げていただきました。

1)地域内、地域外のつながりと協働がもっと進んでいくと、まちがもっと元気になると思っている、2)金沢の生活に息づく文化の魅力を私たちが発信できている、3)各事業に関わる方々が持続的に発展できている。

次にアイデアを提供くださったのが、夫馬賢治氏（株）ニューラル代表取締役）です。ESG は SDGs と密接な関係があり、企業が持続可能な形で成長するためには、ESG への取り組みが重要との見方が急速に広まっているそうです。機関投資家が上場企業でチェックしている ESG の観点において、環境（E）（二酸化炭素の排出量や水の問題、廃棄物など）の方はわかりやすい一方、社会（S）や統治、あるいは経営（G）のテーマは非常に多様なこともあり、「多岐にわたる項目に対し全て定量評価になっているため、ESG も SDGs もこれからは企業の情報公開が大事になる」と述べました。また、「地方債の多くを機関投資家や銀行が買って、金沢市などの財政を支えている。すなわち金沢市がこれから ESG に対して、どれくらい改善していけるかということが、地方債を出す上でのポイントになってくる」と述べました。

最後に「金沢が SDGs 行動計画を作っていくときに私から提案をしたいのは数値目標です。現状を数値で評価し、把握して目標を立てる事は非常に大事です」、「主役は事業者の皆さんで、行政と金融機関、NPO と協働する、これこ



そ私が実現すればいいなと思っている姿です」とお言葉をいただきました。

特別企画として金沢市の高校生が主催するセミナーと連携し、SDGs カフェ×高校生「これからの学校、学びの在り方とは？」を 2 週連続で開催しました。第 1 部のテーマは「ゼロベースでこれからの学校や学びの在り方について対話しよう」でした。はじめに企画者でありファシリテーターの千代航平氏（金沢大学附属高校 2 年）が「画一的な教育が求められてきたが、多様性やグローバルな人材、個性を伸ばす教育などが求められているいま、これからの学びの在り方考えようと今回のこの場を企画した」と語り、今回のセミナーの概要を説明しました。

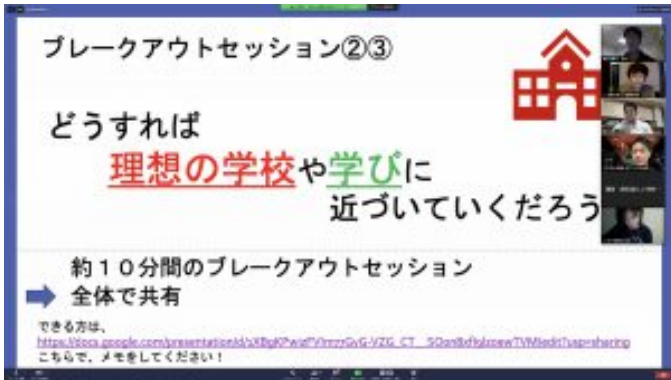


話題を提供いただいたのは木村聡氏（能登高校魅力化プロジェクトコーディネーター）です。このプロジェクトは過疎化が進む能登町の問題に立ち向かうべく、「町内からの進学率を高めて高校の存続と発展を図ること」、「希望する進路の実現の支援」などをねらいとし、高校と地域をつなぐ役割を担っています。木村氏は「学校だけでは対応できない問題に対し、近隣地域や自治体を巻き込み、コーディネーターを設置して物事を前に進めていくような仕組みを作るといことは、これから先、とても大事なのではないかと述べました。

そして、グループワークを行う「ブレイクアウトセッション」に移り、理想の学びや、それを実現できる学校について対話を行いました。「生徒が興味を持ったことを後押しするという教育が求められるのではないかと」、「知識的な勉強だけを強要するのではなく、アイデンティティの確立のためのスキルを向上させるべきではないか」などの意見が挙がりました。

翌週開催された第 2 部のテーマは、「他府県・他国ではどう考えているのか？ 先進事例に触れて対話しよう」でした。話題提供者は、学校と地域とを結ぶキャリア教育コーディネーターという肩書で日々活動している白上昌子氏（くらしクリエイティブ代表・NPO 法人アスクネット顧問）です。まずは高校の先生からの要望が強い、大学・企業をそれぞれ 1 日ずつ体験できる「キャリア・ブリッジ」というプログラムを紹介いただきました。白

上氏は「SDGsのいちばん大事な「誰一人取り残さない」ということを考えて、一人ひとりの思いや命に向き合っていくために、どんな学びの在り方や学校の在り方がいいのかということを考えてみては」と述べ話を締めくくりました。



グループワークでは、「たくさんの成功事例を並べるよりも、逆に失敗例を語ってもらったほうが、その失敗理由を追求していくことができる」など、貴重な意見が多数挙がり、中でも千代氏やお二人のゲスト、また多くの参加者が口にしていたことは、「学校の外部の人間が学校に関わることの大切さ」でした。

第13回は、「市民全員が庭師になろう！金沢SDGsをグリーンインフラ(*)から考える」をテーマとしました。

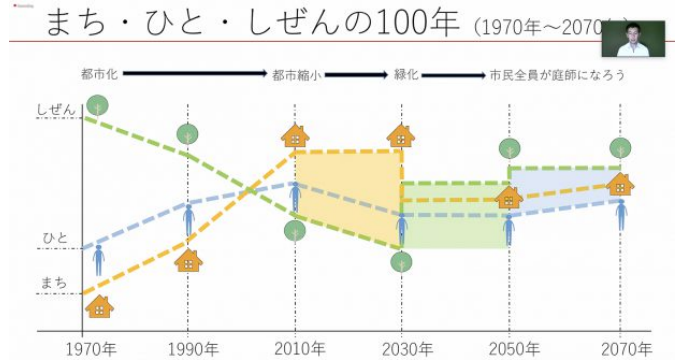
*グリーンインフラとは？ 多機能性という視点から自然を再評価することによって、持続可能な社会形成を目指した土地利用計画のこと。



金沢市は1968年に全国に先駆けて伝統環境保存条例を制定し、その中で市内緑地や用水も保全対象として武家屋敷や寺社群とともに町並みとして残す努力をしてきており、今年発表した『金沢ミライシナリオ』の中でも、「グリーンインフラをつくり、使う」ということを具体的に挙げています。

今回、イマジンしたのはスペインから来日して11年、日本庭園に魅せられて、京都、金沢と研究対象を広げてきたファン・パストール・イヴァールス（国連大学OUIK 研究員）です。ファン研究員は金沢市の「これからのまちのあり方」を住民と考える地域に根差した研究を展開しています。

金沢市では2010年から人口減少するに伴い、空き家が増え、一方の自然はずっと減少しつづけています。そこで、2030年までに駐車場や空き家などのグレーインフラを緑化することがファン研究員のイマジンする金沢の姿であり、そしてその緑を守り続けていくため、「市民全員が庭師になろう」ということを提案しています。



また「金沢は、庭園があるおかげで生態系学的にも文化的にも多様性に富んだまちになっている。人と人の親密な関係は、自然との親密な関係と調和が取れ、また自然と親密な関係からは人と人の幸せが恵まれるなど、日本庭園から受ける恩恵はたくさんある」とファン研究員は述べました。

次にアイデアを提供してくださったのは、国内外のグリーンインフラ事例を幅広くまとめた書籍の出版に関わるなど、多彩な活動されているグリーンインフラの専門家、研究家、広報官の西田貴明氏（京都産業大学 生命科学部 産業生命科学科 准教授）です。はじめに西田氏は「グリーンインフラとは概念であり、環境を守るということではなく、環境の価値を活用して、地域の活性化や、防災・減災につなげていくことが定義とされる。自然の持っている機能を引き出すことによって、経済と社会をうまく回していくということが目的であり、その結果として自然が豊かになっていくことを重視した考え方だ。」と述べ、まだまだ一般的に馴染みの薄いグリーンインフラの概念を説明いただきました。

次に現在世界中で行われている未利用地を緑で再生する活動例を紹介いただきました。日本でも同じような活動を行う余地がたくさんあるそうで、「例えば、駐車場や空き家などもうまく活用していくのが一つ重要なポイントになる。リスクとメリットを重ね合わせて議論していくことも大事だ。」と述べました。

最後に「今日、参加してくださった皆さんとは、今後またグリーンインフラの推進、そしてそれを金沢で実施していく時ご一緒できたらと思っています。」と永井事務局長が述べました。

シンポジウム「いしかわ・かなざわから発信する生物多様性 10年のあゆみ ～ 持続可能な次の 10 年に向けて～」

日時：2020/5/16

場所：オンライン

2010年に愛知県で開催された生物多様性第10回締約国会合（COP10）では、生物多様性を守っていくための愛知目標が採択されました。そして2011～2020年を「国連生物多様性の10年(United Nations Decade on Biodiversity)」と定めて、愛知目標の達成を目指してきました。

2020年はこの10年の節目の年であり、「国際生物多様性の日」である5月22日を記念し、「国連生物多様性の10年」のキックオフシンポジウムが開催された石川県での10年の活動を総括し、次の10年に向け、生物多様性とどのように向き合い持続可能な地域を作っていくかを考えるオンラインシンポジウムを主催しました。

はじめに武内和彦氏（公益財団法人地球環境戦略研究機関理事長・国連大学上級客員教授・東京大学未来ビジョン研究センター特任教授）の基調講演で



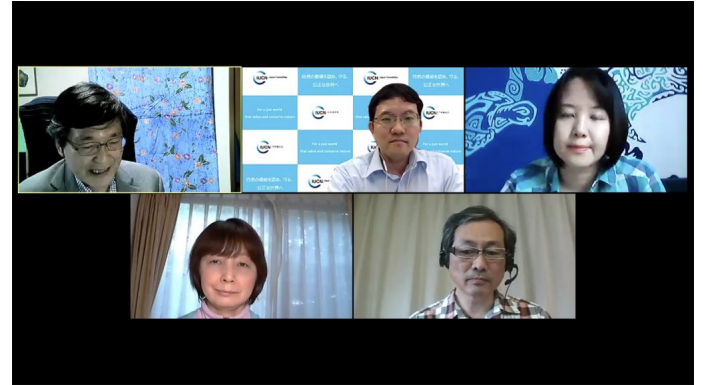
は「生物多様性の10年—これまでの10年これからの10年」と題し、生物多様性のこれまでの10年の総括と、これから先の10年について講演していただきました。SDGs、気候変動、生物多様性、防災について（災害リスクの軽減）、それらをバラバラに考えていくのではなく、多様な取り組みを相乗的に進めていくことが重要だと述べました。

続いて事例紹介として小山明子（国連大学 OUIK 研究員・珠洲市の能登 SDGs ラボ連携研究員）が「能登の里山里海と生物多様性」と題して能登島の取り組み事例を紹介しました。「OUIK が地域に根差した国連機関であることを生かして、地域のネットワーク化、そして世界で同じような課題を抱えている地域が他にもあるので、そういったところと情報共有の場などを作っていくことが非常に重要になってくる。」と語りました。

続いて、藤田香氏（日経 BP 日経 ESG シニアエディター & 日経 ESG 経営フォーラムプロデューサー）から、ビジネスセクターからこの10年を振り返り、この先の展望をお話いただきました。「生物多様性」という概念が浸透してきた印象があると述べ、今



後、SDGs での変革は、都市と地方がオープン・イノベーションで変革を生み出せるいいチャンスなのではないかと語りました。



パネルセッションでは道家哲平氏（国際自然保護連合日本委員会（IUCN-J）事務局長）、鳥居敏男氏（環境省自然環境局長）、イヴォーン・ユ（国連大学 OUIK 研究員）に発表を終えた藤田香氏を加え、渡辺綱男（国連大学-IAS OUIK 所長）をモデレーターに、これまでの10年を振り返って評価するとともに、今後の方向について議論しました。自然の分野から SDGs 達成を行う中で、「知る」「守る」「回復する」「投資する」「人と自然をつなぎなおす」の5つのアクションの入り口をつくり、あらゆる関係者が取り組むことで、「社会変革（トランスフォーマティブ・チェンジ）」を起こしていく必要があるなどの意見が交わされました。最後に渡辺所長は「今まで以上に幅が広くて、今まで以上に柔軟なパートナーシップを作っていくことが大事だということを今日のシンポジウムで皆さんから伝えていただけたと思います。OUIK もこうしたテーマについて、国際的な議論と現場の一つひとつの取り組みをつないでいく橋渡し役となり、これからも皆さんと一緒に活動を進めていきたいと思えます」と述べ、パネルセッションは終了しました。

最後に、中村浩二氏（石川県立自然史資料館館長）より、「今日聞いた話を基に、どれだけ自分たちができているか、モニタリングして評価していくことが大事」と、閉会のお言葉をいただき、約280名というたくさんの方にご参加いただきました今回のシンポジウムは幕を閉じました。

2020 年度日本造園学会 全国大会ポスターセッション

日時：2020/5/23

場所：オンライン

新型コロナウイルス感染拡大の影響によりオンラインで開催されたこの大会にファン研究員が参加しました。250名以上の視聴者が集まったポスターセッションでファン研究員は鏗隆弘氏（金沢美術工芸大学教授）と共に「金沢市旧城下町・旧集落における用水沿い庭園群の研究」と題した発表を行いました。金沢市には市内全域に

55本の用水路が張り巡らされており、庭園へ水を送っている水路も多く、「これらは生物文化多様性のモデルとして保護されていくべきである」といった議論が行われました。



第1回 能登の里海セミナー「里海の保全から考えるSDG14の達成－海洋汚染問題を考える－」
 日時：2020/6/6
 場所：オンライン

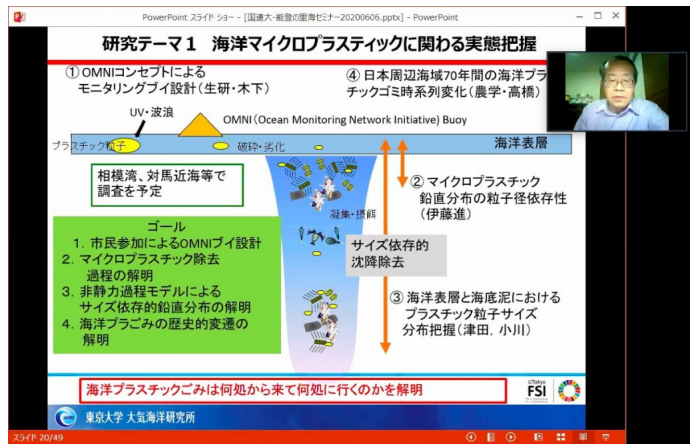
オンライン開催された2020年度第1回目の里海セミナーは「里海の保全から考えるSDG14の達成－海洋汚染問題を考える－」をテーマとし、SDG14「海の豊かさを守ろう」の10個の目標から、SDG14.1「2025年までに、陸上活動による海洋堆積物や富栄養化をはじめ、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に減少させる。」について学びを深める回となりました。



はじめにセミナーの紹介として「能登の里海ムーブメントとSDG14について」と題し、イヴォーン・ユー(国連大学 OUIK 研究員)より発表がありました。「海洋汚染」と一言でいっても、原因は多様です。近年話題になっているプラスチックゴミ問題の他に、産業化学物質や畜産の排出物や日常生活用品の化学物質などの陸上からの流出も汚染源となります。「海洋ゴミを増やさないようにすることも大事だが、そのゴミを再利用することも考えるべき段階に来ている。そしてイノベーション(技術革新)は再利用製品の開発だけにとどまらず、教育などの知識的改革にも適応されるべき」とイヴォーン研究員は語りました。

次に「海洋プラスチックをめぐる課題と研究の展望」と題し、道田豊氏(東京大学大気海洋研究所教授)よりお話いただきました。道田氏は主に海洋表面付近の流れ

と構造の変動を研究しており、その延長で漂流するプラスチックゴミについての調査も行っています。近年話題になっているマイクロプラスチックについて、そしてどのようにゴミが海洋に流れてしまうのかといった点についても詳しくお話いただきました。



続いて浦田慎氏(一般社団法人能登里海教育研究所主任研究員)より、「子供たちの海の学びを考える・能登里海教育研究所の環境教育」と題して活動紹介を行っていただきました。地域で活躍する漁師さんや専門家の方に実際に授業でお話いただくのは海洋教育において非常に効果的な手法であり、能登里海教育研究所は学校側と協力者の間に入り、授業をコーディネートする役目も果たしているそうです。さらに浦田氏は「子どもたちが自ら興味を示し、自分で調べてみる」といった主体的・対話的で深い学びが重要である」と海洋教育の方向性を語りました。



最後のパネルディスカッションは「SDG14.1 海洋汚染軽減の目標達成に私たちができること」についてイヴォーン研究員がモデレーター役を務めました。ディスカッションに加わった早瀬千春氏(輪島の海女漁保存振興会海女)は「磯は海の中の畑。磯が焼けてしまうとサザエやアワビの主食である海藻が育たない。昔の海環境に戻すのは難しいかもしれないが、次の世代のためにも人間の手で壊した環境は人間の手で戻す努力をしないと」と述べました。道田氏は最後に「研究者として科学的根拠に基づいて議論できる世の中を作るために努力したい。皆さんには『私一人がやっても』と思わず、自分

がやっている努力の意義を認識して、地道でも、できることからやって欲しい」と語りました。



閉会の挨拶では渡辺綱男（国連大学 OUIK 所長）が今日の議論を振り返ると共に「里海と関わって暮らしている方々の経験や想いを私たちみんなで共有し、一人ひとりの行動につなげていくことが海の豊かさを守って中できるとても大事なのでは」と述べました。

SUN プロジェクト（持続可能な都市自然プロジェクト）の研究活動の一環として、地元の様々な団体（金沢 SDGs IMAGINE KANAZAWA 2030、日本造園学会石川連絡会、NPO 法人金澤町家研究会、石川県立自然史資料館、北陸グリーンインフラ研究会）からなる SUN 研究パートナーが菊川と幸町を歩きました。人口減少等による、空き家、空き地、駐車場の増加を観察することが目的でしたが、貴重な庭園や伝統工芸の工房などが今でも残っていることがわかりました。



今回の訪問では、永井善隣館別館足軽の家、そして鞍月用水路から直接庭に水を取り込んでいる杉田家庭園、平木庭園の2つの庭園を訪問しました。杉田家庭園では、漆の職人であるオーナーのアトリエを見学させていただき、平木庭園では、伝統的な染色技法、「加賀染め」の職人であるオーナーが、染色後の糊や余分な染料を洗い流すために水路を利用していることを説明してくれました。これらの例からも、金沢の豊かな生物文化多様性は犀川から流れてくる水に由来していることがわかります。

2020年プリンストン大学バーチャルプログラム in 石川

日時：2020/7/22

場所：オンライン

毎年行われているプリンストン大学（米国）の学生が石川県を訪問するプログラム（石川県主催）が、今年度は新型コロナウイルスの影響でオンライン開催となりました。

ファン研究員は約30名の学生に向けて「日本の伝統的な庭園と金沢の生物文化多様性」というタイトルで講義を行いました。ファン研究員は哲学・デザイン・エコロジーの3つの側面に焦点を当て、伝統的な日本庭園について金沢の庭園を例にあげて説明しました。さらに既存の都市自然を保全し、空き家や空き地を再利用し、新たな持続可能な都市自然を創造するためのSUNプロジェクト（持続可能な都市自然プロジェクト）についても紹介しました。参加した学生たちからはたくさんの意見や質問が寄せられました。

珠洲市小学校 SDGs 学習「ゴール14：海の豊かさを守ろう」オンラインレクチャー

日時：2020/9/3

場所：正院小学校

2020年度から、珠洲市の全ての小学校でスタートしたSDGs学習プログラムの一環として能登SDGsラボが「ゴール14：海の豊かさを守ろう」に取り組む正院小学校で導入授業を実施しました。この日はイヴオーン研究員がゲストスピーカーとして「SDG14から考える能登の里山里海を元気にするために私たちができること」オンライン講義を提供しました。

すでに海岸でゴミ拾いなどの活動をスタートさせていた正院小学校の児童たちは、海の問題や能登の里海に関するより詳しい話を真剣に聞いていました。里海は「海のゆりかご」としてとても大切な場所であること、海の問題の多くは人が暮らしている陸によるものであるということ、一度海に流れ出てしまったゴミは何十年、何百



菊川・幸町ウォーキングワークショップ

日時：2020/8/14

場所：金沢市菊川・幸町

年も分解されずに漂い続けるということなど、自分達の暮らしと海のつながりについて学びました。



GIAHS 保全計画策定勉強会

日時：2020/9/4

場所：オンライン

世界農業遺産（GIAHS）能登の里山里海における課題を認識し、より一層連携を強化し、今後様々な活動につなげるため、GIAHS 地域の7市町の担当者に向けたセミナーを開催しました。

はじめに今回のセミナーの講師、永田明氏（国連大学 OUIK 客員研究員）とイヴォーン研究員より「GIAHS とは、次回保全計画で求められていることとは」について講義を行いました。GIAHS の認定基準から世界の様々な地域の GIAHS の紹介、それらの活動、モニタリングや評価についても解説しました。

次にグループディスカッションでは「各市町のこれからの課題とこれからの取組」についてグループに分かれて議論しました。「GIAHS の認知度はまだ低く、認定のメリットが見えにくい、モニタリングをきちんと行い、情報共有をすることが必要。」「高齢化が進み耕作放棄地が増えてきている。草刈りなどの手間がかかる場所で、受け手がない状況である。」「行政が主体ではなく、民間の動きをできるだけサポートしたり、外部の学識経験者などと意見交換するとよい。」といった意見がでました。

永田客員研究員は「ビジネスをしている人を支えていくことが大事である。GIAHS を活用してもらうとともに、地域内での行政・農業従事者・大学教員・民間のネットワーク構築が重要である。」と述べました。

第2回能登の里海セミナー「里海の保全から考えるSDG14の達成－海洋汚染問題を考える－」

日時：2020/9/19

場所：オンライン

第2回目の里海セミナーは、SDG14の10個のターゲットから、海洋生態系のレジリエンス強化や回復への取

り組みに関するSDG14.2と14.5について勉強しながら、海洋生物多様性の保全について考えました。

はじめにイヴォーン研究員より、このセミナーの趣旨とSDGs14における「海洋生物多様性の保全」について説明を行いました。里山と里海は森・里・川・海でつながっており、陸に住みながら、海とのつながりを意識すれば、陸からも海に対する保全ができるのです。里山・里海はいろいろな人の力によって守っていけると述べました。

続いての基調講演では木村麻里子氏（環境省自然環境計画課）より「現状の海洋保護区」「沖合域の新たな海洋保護区制度」「来年以降の



海洋保護区」の3つを中心に発表がありました。海洋の保全は人と環境との関わりがある中での持続可能な利用、つまり人が手を入れることで保全されているような面もあり、一切手をつけずに保護していくのは難しく、これに関しては皆さんにもぜひ考えてもらいたいと述べました。

次に活動紹介として「能登九十九湾におけるアカテガニを介した森と海のつながり」と題し、柳井清治氏（石川県立大学教授）に発表していただきました。九十九湾では、アカテガニが毎年産卵に訪れ、それを利用するいろいろな魚も集まって来ます。アカテガニは森と海のつながりを象徴するような生きものになっており、環境教育において良い材料になっているのではないかと述べました。金沢大学の公開臨海実習では放棄田を整備してアカテガニ・ビオトープを作る活動も行っているそうです。

3. アカテガニと里海の関係

卵を抱えたメスガニ（8月）



次に活動紹介2として鎌村実氏（能登島ダイビングリゾート）より「能登里海の生物多様性にダイバーとしての関わり」と題して発表いただきました。能登半島の東側に位置する能登島でダイビングの店を開き、17年経つそうで「海藻は多種多様で、生きものを集め、魚のゆりかごともいわれています。海藻があることや、小魚や貝類がたくさんいることで海水の浄化がなされています。

そのような景観の美しさは、レジャー・ダイビングにつながってくるところです。」と海洋生物多様性の重要性について語りました。さらに鎌村氏は高校の潜水部と協力し、海藻や海洋環境の調査やゴミ拾いも行なっているそうです。



イヴォーン研究員がモデレーターを務めたパネルディスカッションでは、視聴者からの質問に答えるとともに、「海と陸の生態系はつながっているということを考えると、海を守ろうと思ったら、同時に陸の生態系も見て、両方合わせて考えていかないといけないということに改めて感じた。」など、たくさんの意見や感想をいただきました。

最後に閉会の挨拶として渡辺綱男（国連大学 OUIK 所長）は「皆さんの話から海洋性生物多様性の保全を考えていく上で、とても大事な視点をたくさんいただくことができました。能登の里山里海は世界農業遺産に認定された非常に重要な地。その能登で森と海のつながりをもっと大切にしながら、海とのよりよい関係を目指す取り組みを皆さんと進めていくことができたらすばらしいことだと思います」と述べました。



はじめに共催の金沢市を代表して、山野之義氏（金沢市長）から開催の挨拶をいただきました。山野氏は



「行政においては、日々の業務が結果的に SDGs 達成に繋がると思っています。モチベーションを持続させるためには目標の達成状況を把握出来る環境作りが大切だと思います。それぞれの自治体に相応しい成果目標とモニタリングシステムが必要であり、市民やパートナーにも分かりやすい形で公開され、常に意思疎通を図りつつ推進することが重要だと思います。」と述べました。

1 つ目の基調講演は、サステナビリティと地方創生の研究を行なっている川久保俊氏（法政大学デザイン工学部准教授）から、「ローカル SDGs の推進に向けて一指標を活用したモニタリング



実施の意義」との題で講演いただきました。川久保氏は自治体支援のために、まちの SDGs の取り組み状況を「見える化」しモニタリングするためのローカル SDGs プラットフォームを開発しています。さらにこのプラットフォームには自治体のインタビュー記事や取り組みを公表・共有する仕組みも含まれています。川久保氏は自治体にプラットフォームの活用を促す一方、各自治体が更に進んで現地の実情を反映した SDGs 指標を整備する際には自ら市民を巻き込んでいく必要性があると強調し、「SDGs を身近な自分達のまちの問題だと認識し、自分達の日常で実践していくことが重要だ」と述べました。

2 つ目の基調講演は福島健一郎氏（一般財団法人 Code for Kanazawa/Civic Tech Japan 代表理事）から、「テクノロジーによる市民参画ーオープンガバナンスとはなにかー」と題して、ローカル SDGs 実践と指標モニタリングと市民参画のためのオープンガバナンスとシビックテックについてお話をいただきました。

福島氏は、指標のデータ取得やモニタリングについては市民の参画を得ながら進めていくことが望ましいため、透明性の高い行政、市民が参画できる社会の構築が不可欠であり、つまりはオープンガバナンスの構築が重要だと説明しました。さらに「自治体は出来る範囲の中でテクノロジーをどれだけ活用出来るか考え、オープンマインドでありつつ、市民の参画も促す必要があります。市民側も IT やテクノロジーの技術的な部分を理解し、自ら推進する、コミュニティに参加する、行政との

地域から考える!! 「SDGs 指標のモニタリングとオープンガバナンス」～地域での SDGs 実装に向けて、自治体はどう変わるか～

日時：2020/9/30

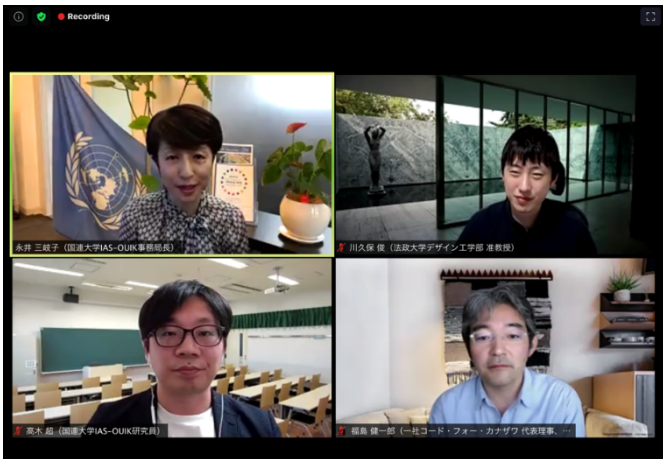
場所：オンライン

SDGs169 のターゲットのうち 65%は自治体の関与がないと達成が難しいと言われるほど、SDGs 実践においては、自治体が重要な役割を担っていくことが国連の様々な会議で言及されています。今回のウェビナーでは、SDGs 指標の設定やモニタリングを通じて、自治体経営に透明性、市民協働、市民参画が促されるような仕組みを構築するためにはどうすれば良いのか、議論を行いました。

協働に協力する意識が重要。お互いにマインドセットを変えていくことが重要です。」と述べました。

3つ目に、山本昌幸氏（加賀市役所政策戦略部政策推進課長）から、加賀市のスマートSDGsの事例について紹介いただきました。

加賀市は、伝統工芸や温泉郷に有名な温泉と観光の都市である一方、人口減少に起因する人材不足や多極分散型の都市構造といった構造的な課題を抱えています。そこで、都市の持続可能性を目指すために先端技術を活用したイノベーション推進を図るスマートシティを目指すことにしています。「スマートシティへの取り組み」としては技術を活用した日常の課題解決をモットーに、ドローン、MaaS、アバター、e-residencyといったツールやシステムの導入を検討、さらに「加賀市版 RE100」として脱炭素社会の構築とエネルギーの地産地消を目指しているそうです。



最後に永井事務局長がモデレーターとなり、以下の内容でパネルディスカッションが行われました。

- ・行政と住民とが協働で SDGs を推進していく中で、行政が SDGs の持つ様々な機能を説明し、一緒に使っていく重要性について
- ・行政内での担当課の連携やリソースの集結の重要性
- ・ローカル SDGs プラットフォームを活用した情報交換や意見発信について
- ・指標疲れと測定・モニタリング・分析の官学民での役割分担について
- ・既存の SDGs を越えた分野（文化、芸術、スポーツ等）での SDGs の推進について

インタビュー記事のご案内

里山・里海の研究を行っているイヴォーン研究員がクーリエ・ジャポンよりインタビューを受けた際の記事をオンラインでお読みいただけます。

「日本人を土砂災害や鳥獣被害から守ってきた「里山・里海」が消えていく」

<https://courrier.jp/news/archives/205906/>



「レジ袋有料化」だけでは日本の海は守れない—コロナ禍で「浪費」を減らして

<https://courrier.jp/news/archives/205907/>



読者の皆様へ

肌寒さが身にしみる冬隣。公私ともに年末に向けて慌ただしい時期に入りましたが、お元気でご活躍のことと拝察申し上げます。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、今年5月に「新しい生活様式」が示されました。OUIKにおいても研究活動やイベントのほとんどをオンラインに切り替え、テレワークや時差出勤などの対策を講じながら業務に取り組んで来ました。関係者の皆様には、上記対策にご協力いただき感謝申し上げます。一方でオンライン開催により、より多くの人に発信できるようになったり、スタッフが地域の活動により活発に参加できるようになったりと、利点や学びもありました。今後も、状況に応じて業務にオンラインコミュニケーションを取り入れながら、OUIKの「ニューノーマル」を模索していきたいと思えます。

この一環として、これまで半年に一度発行して来ましたが、紙版の発行を廃止いたします。今後はより多くの方に OUIK の活動について知ってもらうべく、月一度程度のメールマガジンとして OUIK の活動内容を発信していく予定です。このメールマガジンをご希望の方はお手数ですが、

<https://forms.gle/WY5QuHCYVc1mn6zF6>



長い間 OUIK ニュースレターをご愛読いただき、ありがとうございました。今後ともお引き立てのほどよろしくお願い申し上げます。

UNU-IAS OUIK 職員一同

2020年10月発行

国連大学サステイナビリティ高等研究所

いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット

〒920-0962 石川県金沢市広坂 2-1-1

石川県政記念しいのき迎賓館 3階

Tel: +81-76-224-2266 Fax: +81-76-224-2271

Mail: unu-iasouik@unu.edu

URL: www.ouik.unu.edu

